『ことばの内なることば』

Languages within Language An evolutive approach, Ivan FÓNAGY, Amsterdam, John Benjamins, 2001.

中田　俊介・川口　裕司

東京外国語大学フランス語研究室
ふらんぼー　29（2003）　抜刷

© Flambeau 29 (2003) pp.155-178.
Revue annuelle de la section française, Université des Langues Étrangères de Tokyo

書評論文

『ことばの内なることば 進化的アプローチ』

Languages within Language An evolutive approach, Ivan FÓNAGY, Amsterdam, John Benjamins, 2001. *

中田俊介・川口裕司

はじめに

本稿の執筆者の一人である川口がイヴォン・フォーノジ氏 Ivan FÓNAGY と初めて出会ったのは、Eli-Fischer JØRGENSEN の著書においてであった。その時の驚きは今も記憶している。1980 年代の初頭、André MARTINET を始めとする機能音韻論では、動的共時態という考え方がクローズアップされていた。ところが FÓNAGY はすでに 1950 年代に類似の考え方に到達し、さらに動的共時態の生み出されるメカニズムも解明しようとしていたのである。16～18 世紀のフランス語を分析し、音韻の揺れに明確な形で言及したのはおそらく FÓNAGY が最初ではなかっただろうか。[1]

その後川口は、このハンガリーの言語学者の教えを直接授かる機会にも恵まれた。折りしも *La Vive Voix Essais de psycho-phonétique*, Payot, 1983 が脱稿された時期であった。後に執筆することになる共和国トルコ語に関する川口の二つの論考は、*La Vive Voix* と氏の講義に着想を得ていると言っても過言ではない。[2] 思えばあの時から 20 年の歳月が流れた。氏の言語変化に関する鋭い直観と洞察は、その後も発展と深化を続け、こうして今、828 ページ(本文 698 ページ)に及ぶ一冊の本にまとめられた。

FÓNAGY は ***Languages within Language*** というタイトルを、これまで少なくとも三度用いたことがある。タイトルの意味は最後に考えることにして、その系譜をたどっておこう。一度目は 1973 年に出版された論文であった。論文には「言語伝達の古生物学的アプローチに向けて」という副題が添えられていた。[3] 二回目は 1984 年に精神分析関係の学会においてフランス語で公刊された論文であった。[4] そして三番目が本書であり、「進化的アプローチ」という副題がつけられている。

ところで JØRGENSEN の上掲書からも明らかなように、FÓNAGY はいわゆる学派に属すことなく、また学派を形成することもない研究者である。[5] 彼の信念なのかもしれない。氏は暖かく包みこむような弾力性のある思考でもって言語現象を観察するのだが、それは理論や枠組みを構築するためというよりは、むしろ言語現象の中に入り込み、

内部から点描しながら言語の本質へのアプローチ方法を模索するためである。

パリの南、Parc de Sceaux にあるFÓNAGY宅を訪れるたびに、日本の読者に氏の言語論を紹介したいと申し出ておきながら、これまでその約束は果たされずにいた。それはひとえに氏の該博な知識と教養に対して、浅学の弟子が恣意的な解説を加えることの愚を恐れたからであった。もちろん今もその気持ちに変わりはない。事実、氏の専門領域は、音声学、音韻論、詩学、意味論、文体論、記号学、さらに精神分析にまで及び、読む者を圧倒する。フランスではIvan FÓNAGYと言えば、Georges FAUREとともにイントネーション研究の草分け的存在として有名であるが、このことは亡命者である彼をフランスに招聘したのが音声学者Marguerite DURANDであり、また国家博士号取得後にC.N.R.S.の主任研究員として研究を続けるかたわら、パリ第三大学附属の音声学研究所で音声学を教授されていたことと無関係ではない。

本稿の共著者である中田は、イントネーションを修士論文のテーマとし、必然的にFÓNAGYのよき薫陶に一度ならず浴してきた、いわば孫弟子であると言える。こうして不肖の弟子二人は、愚直なる論評に終始することを覚悟で、この作業に取りかかったわけである。なにぶん大部の著書であり、全体を紹介しつつ論評することは不可能であるため、副題として冠せられた「進化的アプローチ」の意味を解説しながら、音声面と形態・統語面における進化的アプローチの諸問題を考えるにとどめたい。

本稿は以下のような方法で分担執筆された。はじめには川口が執筆し、1章と2章と結論は中田が原稿を用意し、後に川口と内容の検討を行った。3章は川口が原稿を作成した。分担が明確になるように各章に作成者名を付記した。（川口）

1. 進化的アプローチ[6]

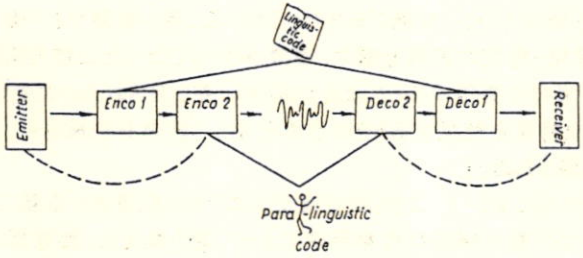
言語の記号体系はそれを運用する一個人にとって、あらかじめ社会的に定められた慣習的なものである。しかしFÓNAGYにとって、そのことは必ずしも音声と意味の連関が常に恣意的であることを意味するものではない。たとえばオノマトペの場合は、個別言語的な多様性は見られるにしても、指示対象と音声との間の自然な連関性を示しているように思われる。

本書で提唱される二重コード化 **dual encoding** による言語記述モデルは、こうした記号化の過程の二面性を有機的に統合し、言語の通時的変化を両者の相互作用として説明するものである。

1. 1. 二重コード化

言語による伝達は、常に音声や文字といった具体的な媒体を通じて行われる。記号の抽象的な意味内容を担うこれら音響的・視覚的実体は、単なる媒体であるにとどまらず、絶えずそれ自身の生み出す意味を伝えてもいる。話し方の個人的・社会的特徴、声の調子による言外のニュアンスや感情・態度の表現、文字媒体における文体や句読点の用い方などがそれである。[7]

二重コード化のモデルでは、このような言語外的情報を記号化していく過程を第二次コード化と呼び、そもそもの伝達対象である言語メッセージ自体の記号化を行う第一次コード化と区別して考える。



第一次コード化の段階では、語は文法規則によって選択・配列され(第一次分節)、各語の発音はそれ自身意味を持たない弁別単位である音素の配列(第二次分節)によってなされる。A. MARTINET は、こうした無限のメッセージの生成を可能にする経済的原理(二重分節)を言語の基本的特性とし、イントネーションなど第二次コード化の領域に属する現象については、そのコミュニケーション上の重要性を指摘しつつも、二重分節構造を欠いた周辺的なものとして位置づけた。[8] 実際、音と意味の連関の恣意性を駆使しつつ、範疇的な意味の区別を実現する第一次コード化に対し、いわゆる発話のスタイルを構成する第二次コード化は明確な指示対象物を持たず、意味区分は相対的・漸次的で、一次的な言語コードに付随して具現する文字通り二次的なものである。

しかしFÓNAGYは第二次コード化の周辺性を認識する一方で、その動的なメカニズムに注目する。第一次、第二次コード化はともに同じ音声(あるいは文字)を媒体とする以上、互いに分かちがたい形で同時的に実現されることになる。すなわち付随的なメッセージとしての第二次コード化は、第一次コード化の産物に対する変形、あるいはその歪みとして具現化されるのであり、それは本質的に動的な過程と言える。第二

次コード化を経ることで、第一次コード化による無標的な言語表現は、音素、韻律的特徴(アクセント・リズム・イントネーション)、文法構造(法・時制・品詞・語順など)、語や文の意味構造、談話構造など言語の様々なレベルにおいて形を変え、意味の変容を被る。それらの具体的な振舞いについては後述するとして、ここでは次に第二次コード化を支配するメカニズムを見ていくことにしよう。

1. 2. ジェスチャと退行

第一次コード化が二重分節に基づき、言語による概念的な思考を実現するものであるなら、第二次コード化はどのような思考原理に従っているのだろうか。

FÓNAGY は 19 ページにおいて、第二次コード化の解説を口頭ジェスチャ oral gesture の説明から始めている。口頭ジェスチャとは、舌、唇、喉頭などの動きや声の高さの変化による感情・態度の表現を指す。著者がかつて行った口腔X線図分析においては、優しさや喜びを表現するときは舌が前方に差し出されるのに対し、怒りや憎しみなど敵対的な感情を表現するときは舌が屹立し、筋肉を収縮させ、口の奥に引っ込む様子が観察された。[9]

二重コード化モデルにおいて、こうした口頭ジェスチャに代表される第二次コード化は、実現不可能な行動を類似の代替手段によって置き換える、無意識的な一次過程思考 **primary-process thinking** の反映として説明される。この場合、「一次過程」[10] は、本書で繰り返し参照されるフロイトの精神分析理論から導入された概念である。類似する対象を同一化し、心的エネルギーの投影対象が自由に転移される原初的思考が一次過程思考の本質を成している。

The part may be used to represent the whole. ... The tongue may stand for the body, the arm, or the penis. The forcibly rolled, stiffened tongue may be associated with threatening penile exposure.The forward movement of the tongue may suggest an approach..., its backward movement a withdrawal.(本書 p.117)

このような無意識における一次過程思考は、人間言語が第一次コード化において実現しているより厳密な概念的思考からすれば、混同や誤謬を含んだ原初的段階への退行 **regression** とみなすことができる。二重コード化モデルは、言語活動における記号の生成を、こうした一次過程思考への退行を含むものとして説明するわけだが、ではなぜこのような退行が起きるのだろうか？

1．3．言語変化におけるメタファー

FÓNAGY によれば、第二次コード化を支配する一次過程思考は、言語の発達段階における単なる退行にとどまるものではなく、外界とのより直接的な接触を希求する人間の原初的な欲望に根ざしている。一方、第一次コード化に結実している二次過程思考 **secondary-process thinking**[10] は、社会的現実への適応を目指すより実際的な思考であり、一次過程思考がそのまま顕現するのを許容しない。その結果抑圧された一次過程思考は、概念的思考による無標な言語メッセージに付け加わるスタイルとして実現されることになる。

つまり言語伝達の場面では第一次コード化に第二次コード化が付随するように見えるとしても、人間の個体発生的・系統発生的な言語獲得においては、二重コード化は逆向きの過程を辿ってきたわけであり、ふだんの言語記号の生成は常にその歴史を反映しているのである。

二重コード化におけるこれら二つの思考の綜合は、メタファーの作用として捉えられる。第二次コード化の加える操作によって、第一次コード化による言語メッセージに新たな意味が付け加わるからである。ここでのメタファーはむろん語の置換えによる意味の転移にとどまらない。メタファー**metaphor** の語源は、ギリシア語の metaphora、すなわちある場所から他の場所へ移動させることだが、本書では言語のさまざまなレベルでの連辞的・範列的移動がメタファーとして考察される。前者の例としては、語順やアクセントの移動、後者では音素の置換え、時制や人称（および人称における数）の間の移動、品詞の移動（名詞の形容詞的用法、あるいはその逆）などである。

注目すべきは、二重コード化モデルがこうしたメタファーの働きを言語変化の原動力として説明している点である。当初第一次コード化に対する文体的な乖離として発生した第二次コード化の表現が、言語共同体の内部に普及し反復して使用されるに従ってその文体的価値が希薄化し、第一次コード化における言語的規則へと取り込まれることで言語はその形を変えていく。

この希薄化の過程は、脱有縁化 **demotivation**、あるいは記号の表現と内容の間の自然な連関性が消滅しメタファーがもはやメタファーとして感じられなくなる過程である。我々は日常の言語使用において発音や文法の規則を自動的に運用し、また発話の多層的な意味構造を駆使して複雑な意思疎通を実現している。これらの能力は、脱有縁化が言語のさまざまなレベルで繰り返された結果獲得されたものである。語の意味が確立すると、オノマトペ的な音声のジェスチャは影を潜める。派生的な意味の普及とともに文字通りの意味は後退していく。また慣用表現においては、文の元来の意味はもはや痕跡をとどめるのみとなっている。FÓNAGY によれば、脱有縁化は

言語進化に不可欠な条件なのである。

二重コード化モデルは言語への進化的アプローチだが、進化を単に順行的な過程として説明するものではない。人間言語がすでに高度な概念的思考を実現しているとしても、言語変化を引き起こす文体的変形は常に退行的な一次過程思考を発生基盤としているからである。

1. 4. 動的共時態

進化的アプローチにおいて音声の変化は、メタファーによって文体的価値を生む変形が施され [11]、やがて中立的な発音として定着していく過程として説明されている。こうした音変化は話者に変化として意識されない。変形によって生じる多様な表現の形は、後に変化の過程として時系列的にたどることができるとしても、その時々の話者には共時的な変異体としてみなされるからである。

現代フランス語の発音に見られる地域的・社会的多様性は、M. GRAMMONT、P. FOUCHÉらの音声学者によって明確に意識されつつも、唯一の規範的体系であるパリの発音からの逸脱あるいは乖離とみなされていた。[12] しかし個々の変異にとどまらず、共時的に複数の音韻体系さえ存在することを示したのは MARTINET とその機能音韻論の後継者たちである。MARTINET (1945)以降行われた数々の音韻調査は、地域や社会階層のみならず世代間・個人間にも体系の違いが見出されること、すなわち「同じ言語共同体において、伝達を阻害しないながらも発音の自由さが存在しうる」[13] ことを明らかにした。

二重コード化モデルは、このような動的共時態 **dynamic synchrony** のメカニズムをメタファーの弁証法的性格から説明しようとする。メタファーによる文体的変異の創出、あるいは第二次コード化による変形は、それが統語現象なら文法化、音声なら音韻化されるまでに、脱有縁化による定着の過程を経るのであって、ただちに言語変化に結びつくわけではない。その間、共時態としての言語構造はそれを分析する者にとって、自己矛盾を含んだものとして現れるのである。

FÓNAGY 自身の調査によれば、ハンガリー語の hossú「長い」の長母音/u:/を短く[u]と発音することは、70～80 歳の人々にとってはぞんざいな文体的価値を伴なうが、10 歳から 30 歳までの若い世代にとっては中立的な発音であるという。また本稿の冒頭で言及した 1950 年代の論稿 [1] では、17～18 世紀のフランス語に見られた père「父」の洗練された発音[pez]は、pèse「重い」の中立的発音と何ら変わらなかったことが指摘されている。これら[pez]と pèse の二つの[z]を区別するものとして、当時 FÓNAGY は動的／静的という弁別素性を提唱している。両者は、pèse が中立的な音素として音

韻体系に定着しているのに対し、他方は言語変化を引き起こす動的過程にある文体的変異であるという点によってのみ区別される。動的共時態に現れる自己矛盾は、共時態における言語進化の現われとして捉えられるべきものなのである。（中田）

2. 音声における進化的アプローチ[14]

音声面では調音と韻律的特徴の各レベルについて、5 章では日常言語を、12 章では詩的言語を対象として詳細に論じられている。詩的言語の分析はメタファーの多様性を理解するうえで重要な位置を占めているが、紙面の都合からここでは日常言語についての考察のみを扱うこととし、二重コード化モデルにおける進化的アプローチの特徴をよく示す分析例としてオノマトペなどの音象徴、音調ジェスチャ、アクセント移動の三つのテーマを取りあげる。

2. 1. 音象徴

ソシュールはオノマトペが言語間で異なることを例示しつつ、その記号としての恣意性を主張した。[15] FÓNAGY は従来の考え方には「恣意的」と「慣習的」であることの混同が見られると指摘する。言語が慣習的な記号だからといって、それが恣意的であるか有縁的であるかは判らないからである。FÓNAGY にとってオノマトペは、音と意味の間に有縁的な連関性の見られる慣習的な記号、いわゆる「有縁的で慣習的な記号 signe conventionnel motivé」なのである。

実際、系統の異なる言語間で音と意味の対応関係に類似性が認められた場合、そこには恣意的でない有縁的な連関が存在すると言うことができる。FÓNAGY は音素体系の異なるハンガリー語とドイツ語の対をなすオノマトペについて、語中の音素の位置や組み合わせを考慮することでそれらの音的類似性を統計的に明らかにした。

オノマトペ以外の語彙にも音と意味の有縁性はあるのだろうか。FÓNAGY の調査によれば、ハンガリー語、フランス語、英語に共通して、r音は怒り、激しさ、硬さなどを意味する語に現れる頻度が高く、l音やm音は愛、優しさ、柔らかさなどを表す語により多く現れることが心理実験により確認された。これらの場合、音は単語ではなく、より広い概念領域との間で有縁性を示していることに注意したい。また音の側も語の音声全体ではなく、音素やその調音方法が検討されなくてはならない。言語記号の恣意性は語を単位として論じられることが多いが、音と意味の有縁性にそのような単位を設定することは難しい。FÓNAGY の用いている統計的な手法はその困難を克服するために有効な手段になっている。

オノマトペや感情・感覚をあらわす語彙に見られる音象徴の現象は、たとえばatome「原子」や triangle「三角形」のような科学的語彙には見られない。科学的語彙は、その音と意味の連関が極めて恣意的である。両者の差異を説明するのは精神分析理論から援用された第一次過程思考と第二次過程思考である。前者は欲動の直接的な充足を得るべく対象を模倣し、それとの一体化をはかろうとする。一方後者は、現実世界に適応すべく、対象のより明確な把握・伝達に努め、前者の衝動的な顕現を制御しようとする。しかし両者は二元的に対立するのではなく、そのバランスが音と意味の有縁性または恣意性の度合いを決定する。FÓNAGY (1980: 1-26)[16] は音声学で音の記述に用いられる語彙、たとえば「明るい」母音のような例を引き合いに出して、感覚的な語彙が次第に記号的透明度を増していく過程を経た結果、科学的語彙として用いられるようになったことを指摘している。

2. 2. 音調ジェスチャ

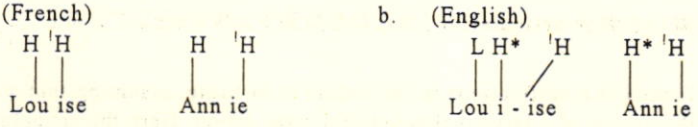
音調ジェスチャ **tonal gesturing** とは、声帯の振動数を上下させながら声の高さを変えることであり、一般にはイントネーションと呼ばれている。FÓNAGY によれば、舌や口腔や唇の形を変化させる口頭ジェスチャ[17] に比べ、音調ジェスチャはより高度な表現力を獲得しているという。

実際、口頭ジェスチャに比べて、音調ジェスチャはその領域が「声の高さの動き」という抽象的な音響空間に移し変えられることで、より精確な意味の表現が可能になっている。たとえばイントネーションは、怒りや悲しみなどの直接的な感情表現のみならず、舌や唇の動きだけでは伝えられない皮肉や疑惑といった対人的な態度、さらには疑問、感嘆、命令など様々なモダリティの区別をも実現するに至っている。

1) Vous ne dites rien. ↗↘
2) Vous ne dites rien. ↘↗
3) Vous ne dites rien. ↘

たとえば LÉON (1992: 121)[18] に挙げられている上の例では、統語構造にモダリティの違いが反映されていない。このためイントネーションのみが断定、疑問、命令を区別することになる。1970 年代以降、このようなイントネーションの弁別機能に対しても、音素の弁別素性による音韻記述と同様の記述方法が適用されるようになった。D.R. LADD (1996)[19] は、イントネーションの担う情報として言語的情報と言語付帯的 **paralinguistic** 情報とを区別し、前者は範疇的な意味の弁別を担う限りにおいて音韻論的記述の対象となると述べている。以下は、同書で呼びかけ曲線 **calling**

contour と呼ばれる、遠くから名前を呼ぶときに特徴的に現れるイントネーションの分析例である。



L、H、¹H はそれぞれ「低 Low」、「高 High」、およびその「中間」の高さを表し、英語の H*は語彙アクセントの位置を示している。韻律構造と音節構造を互いに自律的なものとし、両者の結合の仕方に個別言語的な差異(この場合は語彙アクセントの有無)を帰することで、二つの異なる言語に対して共通のイントネーション・パターン(H¹H)を用いた説明が可能になっている。

この記述方法においてはHやLがそれ自身意味を持たない音素のように扱われ、イントネーションに音韻論的構造を認める立場がとられている。一方 FÓNAGY にとってイントネーションはあくまで声によるジェスチャであり、音と意味との自然な連関によって成り立つものである。二重コード化モデルでは、イントネーションと文の意味の相互作用はメタファーとして捉えられている。たとえば疑問文に命令の下降調がかぶさると、本来の上昇調にはない確認や叱責の意味が生まれる。第5章ではこうした音調的転移 **melodic transfer** の類型化が試みられている。

次にイントネーション研究における進化的アプローチとは、どのようなことを意味するのであろうか。FÓNAGY はイントネーション・パターンの共時的多様性とともに、その通時的特性にも注目する。たとえば疑問詞に始まる疑問文は、無標の文末下降イントネーションが、ため息のような別の感情表現に置き換えられることによって、疑問詞による感嘆文へと変形される。この場合、疑問詞を含む文の中に感嘆文のイントネーションが混在することは、かつてのメタファー作用あるいは置き換えの痕跡と捉えられ、通時的透明性 **diachronic transparency** を示すものと考えられる。こうした分析は、疑問文という一つの共時態の中に、メタファー作用による通時的進化の軌跡を見ようとするものであり、動的共時態の分析に他ならない。

イントネーションはそれがメタファー的に使用されることで新たな意味の生成につながっていく。イントネーションはそうした言語進化の重要な原動力として位置づけられているのである。音調ジェスチャの本質は、その部分的な音韻構造ではなく、むしろ一次過程思考に基づくメタファー作用なのであり、その点に口頭ジェスチャとの共通性が見出されるわけである。

音調ジェスチャと口頭ジェスチャの類縁性については、イントネーションの共時的な音響構造を分析している研究者たちからも仮説が提出されている。C. FOUGERON & S.A. JUN(1998)[20]は、発話速度の変化がイントネーションに与える変形を説明する中で、声帯の振舞いを構音 **articulation**、すなわち口頭ジェスチャとして分析している。

> ...we have looked at modifications in intonation at fast rate, assuming that an f0-contour is the output of a laryngeal/subglottal articulation. Here the articulatory gesture is not the spatial displacement of one articulator (such as the tongue) toward another, but rather a variation in the frequency of vibration of the vocal folds. (C. FOUGERON & S.A. JUN (1998: 58-59))

この論文では、発話速度を速めることによって韻律構造が再組織化され、それに伴なっていくつかの語頭アクセントが脱落することが報告された。ところでこの語頭アクセントは、FÓNAGY が語末アクセントの通時的な移動としてその生成を説明しているものである。

2. 3. アクセント移動

フランス語が英語のような語に固定されたアクセントを持たず、意味のまとまりをなす語群(リズムグループ)の末尾にアクセントが置かれることはよく知られている。

(*Oui*) (il m'a *dit*) (qu'il vien*drait*) (mais je ne le crois *pas*)
(Léon, 1992 : 100, 斜字体筆者)

同じ文であっても、リズムグループの数は発話のスタイルや速度によって変化するため、上の例を三つ以下のリズムグループによって発音することも可能である。しかしいずれの場合でもアクセントを担うことができるのは常に語の末尾の音節である。

一方、C'est *ma*gnifique! のように、語頭が強く、高く、かつ長めに発音されることがある。従来このようなアクセントは強調アクセントと呼ばれ、あくまで語を適用の領域としその意味を強調するものとして、上のリズムグループの末尾アクセントとは全く異なる機能を持つとみなされてきた。

しかし FÓNAGY (1979)[21]は 1940 年から 1975 年に渡る音声資料の分析によって、語頭アクセントが語の強調にとどまらず、リズムグループの冒頭を境界づける機能をも担うに至っていることを明らかにした。たとえば *vin*gt-quatre *heu*res、à *pro*téger la F*ra*nce においては、冒頭アクセントと末尾アクセントの双方によってリズムグループが区切られ、句全体の意味的まとまりを表している。このような両極構造によるアクセント

分布を FÓNAGY はアクセント弧 **arc accentuel** と呼んだ。

アクセント弧を形成するリズムは、1940 年代には感情や表現意図を反映したスタイルに過ぎなかったのだが、テレビやラジオなど一部の職業的領域において普及した結果、中立的なリズムとして次第に一般化するようになったという。こうした過程を彼は、表現的スタイルの堆積 **entassement** と呼んでいる。二重コード化モデルに即して言うならば、第二次コード化による文体的効果が反復して用いられるうちに、意味が平準化して定着し、第一次コードとして文法化しつつあるということになるだろう。

フランス語のリズムグループが語頭・語末アクセントによる両極構造を持つ傾向にあるとする FÓNAGY の分析は、基本的にはその通時的な生成過程に着目したものだったが、共時的なアクセント記述理論にも大きな影響を与えている。生成音韻論の枠組みに基づく A. DI CRISTO の音声合成モデルでは、アクセント分布の基底構造としてアクセント弧が取り入れられた。[22] 以下の図では、発話は韻律脚 **pieds**、韻律語 **mot prosodique**、イントネーション単位 **unité intonative** という階層構造をなすものと考えられているが、なかでも韻律語は従来のリズムグループに相当し、語頭と語末アクセントによるアクセント弧をその構成単位としている。

```
                                                        X    Enoncé
                X           X                           X)   Unité Intonative
        X       X)     X    X)             X            X)   Mot Prosodique
X   X   X)  X   X)  X  X) X  X)    X   X   X)    X X    X)   Pieds
il  a   ren-con-tré les é-cri-vains de  la  con-tes-ta-tion
```

FÓNAGY によれば、語頭・語末のアクセントは語中の音節の位置、文中の語の位置、音節を構成する音素の種類、語の情報量や文法的機能、発話スタイルなどの複合的要因によって確率論的に実現されるものである。したがって両者とも位置が不安定なうえ、環境によっては一方が脱落することもある。またその音響的特徴である長さ・高さ・強さの変化も一様ではない。上のモデルは構文情報を基盤にアクセント分布を決定していくものだが、これらの諸要因を取り込む努力が今も続けられている。

FÓNAGY の提示したアクセント構造は発話の文体的な多様性を分析する際にも取り入れられている。C. ASTÉSANO (2001: 157)[23] は位置と機能に基づいてフランス語アクセントを以下の五種類に分類し、各々の頻度や実現形態(主にアクセントの長さ)の差がインタビュー・ニュース・朗読といった韻律的スタイルの違いを生み出すことを統計的に証明してみせた。

		fonction	
		rythmique	sémantico-pragmatique
distribution	initial	accent initial rythmique	accent initial emphatique
	final	accent final de syntagme	accent final d'unité intonative non terminale accent final d'unité intonative terminale

表のように語頭・語末アクセントはリズム境界を表示するか、あるいは強調・焦点化を行うかのいずれかの機能を担って実現する。しかし FÓNAGY の指摘するように、リズムグループは常にアクセント弧を形成するとは限らず、語頭アクセントが脱落する場合もある。ASTÉSANO の分析では、インタビュー・ニュースは朗読よりもアクセント弧の発生率が高いことが報告されている。また朗読では他のより口語的なスタイルに比べ、語頭の強調アクセントがかなり短く実現されることも確認された。

これらの共時的な音声構造の記述は、言語表現は常になんらかの機能を担い、話者は意思の伝達のためにその機能の選択を行うという考え方に基づいている。DI CRISTO の韻律モデルによれば、発話においてアクセント弧はリズムグループを形成し、聞き手に意味的な区切りを伝えるものである。ASTÉSANO の分析では、各種アクセントの長さや頻度の差異は発話スタイルを区別する文体表示機能を持ち、話者はそれらを戦略的に使い分けていることになる。

こうした機能主義的分析は、主として伝達の場での意味に関心を払う話者の立場から言語を観察するものだが、進化的アプローチにとってそれは言語進化の共時的側面の分析に属し、同じ現象は通時的側面からも捉えなおされなければならない。多様な文法的・文体的変異は、話者の選択肢としてあらかじめ静的に存在しているわけではない。むしろそれは動的な過程にある歪みであり、その漸次的な定着の過程は常に進行しているのである。

とはいえ FÓNAGY は 653 ページにおいて Roman JAKOBSON の言葉を引用しつつ、言語に共時態を措定することは不可欠であるとも強調している。第二次コード化による変形をそれとして区別できるのは共時態における変異の多様性としてであり、また上に述べたような動的共時態のメカニズムを記述するためには、静的な共時態とそれに加えられる動的な力という二つの軸を設定することが必要だからである。（中田）

3. 形態・統語における進化的アプローチ[24]

形態レベルや統語レベルの様々な言語現象のうち、紙面の都合もあり、ここでは他の文献において、あまり分析の対象になったことがないか、あるいは少なくとも進化的観点から一度も分析がなされたことのない三つのテーマ、間投詞、拘束的発話、遊離構文だけに絞って考察することにする。

3. 1. 間投詞

63 ページの解説にあるように、間投詞 interjection とは文字通り、「間に投げこむもの interjectio」の意味である。間投詞は文中の他の要素と相性がわるく、一匹狼的であり、独立心が強く、自分だけで一文を構成することさえある。また間投詞は音声と意味の分化が未熟なカテゴリーと言われる。

同じページに引用された4世紀の文法学者 Donatus は、間投詞を未整理詞 **voce incondita** と名づけた。一筋縄でくくることのできない文法カテゴリーだからである。Donatus の西欧語文法における影響力はひじょうに大きく、たとえば彼の *Ars minor* は中世において最もよく読まれた文法書の一つであった。七世紀には様々な翻訳が存在していたようである。そうした翻訳版の一つであるマザリヌ図書館写本 3794 番には、13世紀の作とされる古フランス語の *L'Ars Minor* が筆写されている。26 葉の表面に間投詞についての解説がある。中世において間投詞はどのように捉えられていたのか、それを見てみよう。

まず、間投詞とは何かという問いかけには、不完全な思考や声の感情を表す品詞であると答えている。

> «Qu'est interjection? Une partie d'oroison qui senefie affection de pensee o votz non pas parfaite.»
>
> Siegfried HEINIMANN, "L'Ars minor de Donat traduit en ancien français," *Cahiers Ferdinand de Saussure*, 23, 1966, p.57.

次に、間投詞には具体的な指示対象物があるわけではなく、抽象的な意味しかないことが記されている。

> «Quantes choses avienent a l'interjection? [Une. – Quele?] Signification seulement.» (*ibid.*)

最後に間投詞の意味として、喜び、苦しみ、驚き、恐れの四つが挙げられている。

«– En quoi est la signification de l'interjection? Ele est en ce que l'une senefie leesce, ut *evax*, l'autre doulour, ut *heu*, l'autre admiration, ut *pape*, l'autre paour, ut *attat* et similia.» (*ibid.*)

中世以来現代に至るまで、間投詞の定義はさして進化していないように思われる。上の解説から判るように、間投詞には明瞭な概念的意味が存在しない。音声と意味が未分化なカテゴリーなのである。たとえば上例のheuは、中間的で曖昧な母音の音色自体が、苦しみという沈んだ陰鬱な気分を表している。ところがその苦しみが具体的に何に由来するのかというと、全く明らかではない。同様に、喜びを表す *evax* では、狭い母音のeから、弱い摩擦音のvを介して、広くて明るい母音のaへと調音が変化していくが、この移り変わり自体が、喜びにともなう精神の開放を表現していると言えよう。*Pape* と *attat* では、瞬間的な閉鎖と開放をともなう子音pとtの間に、広くて明るい母音のaが挿入されており、非日常的な感情の発露が、そのとき突然に生じたことを表している。また *attat* では、重子音化-tt-が起きていて、恐怖に対する切迫感が感じとられる。

しばしば引用される例であるが、ラテン語の in-fans は、「ことばを知らず話すことができない状態」という意味であり、喃語期になっても、幼児のことばの音声と意味はいまだ未分化な状態にとどまる。575ページに引用された1世紀の詩人 LUCRETIUS の一節はとても示唆的である。

videtur / Protrahere ad gestus pueros infantia lingua
ことばを話せないために子供たちはジェスチャをするように見える

子供の場合、ジェスチャは明らかに言葉を補完するものであるが、逆に言えば、成長するにつれて、日常生活の中から子供じみたジェスチャがそぎ落とされ、それを補完するものとして間投詞が生み出されるとは考えられないのだろうか。そこにはジェスチャから恣意的な言語記号までの一連の段階を読み取ることができる。いずれにせよ、進化論的にみて、間投詞が言語の原初的な状態を表していることは疑う余地がない。

このような原初的記号、すなわち音声と意味の関係が恣意的ではなく、そこに何らかの自然な連関性が成り立つような記号は間投詞以外にもある。たとえばすでに述べたオノマトペである。両者は進化的アプローチからすると、同じ初期段階に位置し、その意味で言語的退行を示す例と言ってよい。ただし本書では明示的に述べられていないが、両者には重要な相違点がある。鋭い洞察力によって両者の違いが、記号生成のメカニズムそのものの中にあることを見抜いたのは Serge KARCEVSKI であった。

彼の考えによれば、オノマトペは聴取行為の産物であり、間投詞は発声行為の産

物である。[25] オノマトペは言語外の現実に存在する音を、人間の聴覚が忠実に写し取ったものである。したがって少なくとも聴覚という感覚フィルターを経て言語化された記号である。これに対して間投詞は、様々な精神状態の下で、人間が発するであろう音声そのものであり、オノマトペよりも生の状態に近い。両者は記号生成のメカニズムが根本的に違っているのである。

間投詞もオノマトペも言語外の現実、あるいは言語外にある発話の状況と切っても切れない関係にあるわけだが、いずれも単語レベルにおける言語現象であった。これとよく似た現象が文レベルで生じるとすれば、それはどのようになるのだろうか。それを次に考えてみよう。

3. 2. 拘束的発話

194 ページの定義によれば、拘束的発話 **bound utterances** とは「典型的な社会状況と密接に関連しながら繰り返し現れる発話のこと」[26] であり、たとえば C'est la vie. のような発話が拘束的発話である。拘束的発話の特徴は、発話が実際の状況に結びついているため、状況が整えばいつも繰り返し現れる。いわゆる常套句もこのタイプの発話に属する。また Ne t'en occupe pas ではなく、ne が消去され T'occupe pas.となったり、Allez! のように単数形を持たないなど、文法規則から逸脱した形式になることもある。

なぜ拘束的発話というものを考えておく必要があるのだろうか。それは意味には大きくわけて、概念的意味 **signification** と状況的意味 **sens** が考えられるからである。後者は実際の状況が設定されないと決まらない意味であり、それが概念的意味と異なるからこそ、拘束的発話を通常の発話と区別しておく必要が出てくる。

196 ページには Manfred BIERWISCH の意味の四レベルが引用されているが、結局のところ FÓNAGY は、linguistic meaning と literal meaning を概念的意味ととらえ、utterance meaning と communicational meaning を状況的意味と考えているように思える。

> Every utterance is 'situation-bound' insofar as utterances are produced in given situations and in a given context, which specify their present or *occasional* meaning, according to Herman Paul, as opposed to *usual* meaning ([1880] 1920: 74-85). (p.195)
> Communicational meaning arises in speaker-hearer interaction on the basis of the utterance meaning. (p.196)

拘束的発話は通常の言語記号と同じく、音声と意味の関係に次の二種類があり得る。

(1) C'est dans quel prix?
(2) Ça vaut combien?
(3) C'est combien?
(4) C'est dans les combien?

(1)〜(4)の拘束的発話はいずれもよく似た状況的意味をもっており、類義的な発話と言える。他方、

(5) C'est bientôt fini? もうすぐ終わるの
(6) C'est bientôt fini! やめなさい

(5)は通常の発話であるが、(6)は状況的な意味を表す拘束的発話である。したがって(5)と(6)の c'est bientôt fini は同音異義的である。[27]

198 ページでは、フランス人とハンガリー人の違いに触れながら、拘束的発話が状況的意味だけでなく、文化的意味も担っていると述べられている。他の例を用いてそのことを補足しておこう。同じフランス語であって、言語を使用する状況がそれほど違っている筈がないのに、同じ拘束的発話が全く異なる状況的意味を表す場合がある。

ベルギー	フランス
s'il vous plaît さあどうぞ	s'il vous plaît お願いします

カナダ	フランス
bienvenue どういたしまして	bienvenue ようこそ

これらの違いを説明するものは、おそらく地理的要因あるいは文化的要因以外にはあるまい。

ところで慣用表現や連語等と拘束的発話の違いは、しばしば微妙である。とはいえ FÓNAGY によれば、慣用表現と違って拘束的発話の意味は、たいてい字義的意味から大きく隔たることはないという。[28] 拘束的発話がその字義的意味を失っていくと、最終的には、拘束的発話が語彙単位へと凝結していく。

(7) On habite là depuis, *je ne sais pas*, une dizaine d'années.

(7)の je ne sais pas は peut-être に近い意味をもち、統語的ふるまいも類似している。拘束的発話 je ne sais pas は意味の弱化によって副詞に文法的転移を起こしていると言える。このように拘束的発話は、語彙変化や統語変化の源となりうる。拘束的発話のそうした動的な面については、8. Fading and dynamics, pp.244-265 に詳しい。

拘束的発話が言語変化と関連することは理解できたと思うが、進化的アプローチとどのように関係しているのであろうか。FÓNAGY によると、拘束的発話は言語の原初的段階への回帰なのである。たとえば/hoppa/と言いながらヨダレ掛けをつけて遊んでいた子が、後にそのヨダレ掛けのことを/hoppa/と呼ぶようになる。もともとこの子にとって/hoppa/は、特定の対象物(ヨダレ掛け)を指示していたのではなく、ヨダレ掛けをつけて遊んでいる状況自体を指示していた。/hoppa/は原初的段階においては、音声と意味が未分化な状態であった。ところが後にその状況からヨダレ掛けが抽象化された結果、ヨダレ掛けが/hoppa/と呼ばれるようになる。こうして/hoppa/は限定された意味と明確な指示対象を表すに至った。

拘束的発話は特定の対象物を指示するのではなく、漠然とした発話の状況を指示する。つまり音声と意味が未分化であった言語の初期段階への回帰を表しているのである。拘束的発話はそれが使用される状況と切り離すことができず、我々の頭の中には状況とともに記憶されている。いわゆる記号としての抽象化がなされていない状態であり、原初的段階にとどまっている。そのことを裏づける証拠もある。重度の失語症患者は、ごく簡単な文章を組み立てることさえできない。ところが彼らは comment allez-vous や je vous en prie のような拘束的発話を発音することができるのである。[29] それは拘束的発話が状況とともに記憶され、音声と意味が未分化な原初的記号だからである。

拘束的発話の中で、とくに統語変化として注目されるのは他動詞における直接目的語の省略であろう。

(8) Ce n'est pas cher, *j'estime*.
(9) L'entretien des moquettes, *on connaît bien*. (1975 年のテレビ CM)

FÓNAGY は直接目的語が省略された他動詞の構文を詳細に分析したことがある。直接目的語の省略は、主語が生物で、目的語が無生物のときに可能であるとしばしば主張されてきたが、彼の集めたコーパスによれば、それは必ずしも正しいとは言えず、また直接目的語を省略できる他動詞は予想以上にたくさんあるという。20 名の言語

学専攻の大学生を調査したところ、以下のような傾向が見つかった。

・疑問形、命令形、副詞補語があれば省略の可能性が増す。
・若い人のほうが省略が多い。
・動詞が一般的な単語でない(例 éduquer)ときは省略は起きない。
・省略すると意味が曖昧になるときは省略されない。
・拘束的発話と競合するときは省略が起きない。
(Ivan FÓNAGY, "J'AIME □ JE CONNAIS □ Verbes transitifs à objet latent", Revue Romane, 20:1, 1985 :

直接目的語の省略が可能なのは、発話が状況と密接に結びついているからである。その意味において直接目的語が省略される他動詞の構文も拘束的発話の一種であるとFÓNAGYは主張する。

ところで直接目的語が省略された発話 on connaît bien は、上例(9)のように、しばしば発話の他の部分から切り離されることが多い。こうした構文は遊離構文 **dislocation** と呼ばれる。(9)では直接目的語 l'entretien des moquettes が文頭に遊離された形ですでに提示されているため、他動詞 connaître の直接目的語が通常よりも容易に省略され、on connaît bien という発話になったと考えられる。いずれにせよ他動詞の直接目的語の省略は、遊離構文と部分的に関連する。最後にその遊離構文について考えることにしたい。

3. 3. 遊離構文

遊離構文は言語獲得の初期段階に現れる重要な統語現象の一つである。1972年の *Lingua* 30号に掲載された論文の中で、FÓNAGYは息子 Peter (Pierre) と娘 Eva がハンガリー語を獲得していくようすを詳細に記録した。次の例は1歳8ヶ月の時の Peter の肉声である。

/'auto'/ /'auto'ɛ:mɛnt/ (Auto.L'auto est partie) [Pierre 1;8]
/'tseuza/ /'adoda/ (Crayon. Donne-le.) [Pierre 2;8] [30]

ここでは/'auto'/, /'tseuza/が文頭に遊離されている。周知のごとく、フランス語の話しことばでは、こうした文頭遊離構文をよく見かける。

(10) *Cette veste*, je peux l'essayer?

遊離構文の分析においてしばしば引用されるBARNESの論文によれば、遊離構文ではふつう前方照応が見られるが、代名詞((10)における l')は全体の 62%にしか現れないという。つまり残りの 38%において、さきほどの(8),(9)のような直接目的語を省略した他動詞の遊離構文が現れるのである。また普通名詞の主語が文頭に遊離されると、照応辞は(11)や(12)のように ce か ça になる。[31]

(11) *Cette salade*, c'est une salade à quoi?
(12) Mais, mais 'les restes de fromage' *ça* veut dire quoi? (BARNES, 1986, p.210)

文頭の遊離要素はどのような機能を担っているのだろうか。情報構造という視点からは、文頭の遊離要素はトピック化の機能をもっているとしばしば指摘される。それではトピック化と幼児言語における文頭遊離構文の関係はどのようなものであろうか。

助動詞や時制の獲得といった形態論の研究にくらべて、幼児言語における語順とその情報構造の研究は数が少なく、実はあまりよく分かっていない。MacWHINNEY and BATES は英語とイタリア語とハンガリー語をクロス言語的に分析したが、語順と情報構造の間に明確な連関は見出すことはできなかった。[32] とはいうものの子供は少なくとも言語獲得の初期段階において、新しい情報を発話の先頭に置く傾向があるとしばしば主張されてきた。これは子供が言語外の文脈を前提として発話を組み立てることと関係があるという。[33] つまり言語外にある新しい情報を既知のものとし、それを主題に立てて発話を構築していく。おそらくはこの点にトピック化と幼児言語における文頭遊離構文を結びつけるヒントがあるのではないだろうか。

幼児語のもう一つの統語的特徴は、文末にくる要素あるいは一連の発話が、先行する発話の内容を補足していることである。Peter と Eva の例をあげてみよう。

/'haʃonli:t/ /'la:mpa:hos/ (Ça ressemble. À une lampe.) [Pierre 1;11]
/'api/ /'ɛ:mɛnt/ /'ɛ:mɛnt 'api/ (Papa est parti. [Il] est parti papa.) [Pierre 1;6][34]

直前の内容の一部を繰り返したり、そこに内容を付け加えながら発話を進めるやり方である。大人の言語では、こうした補足的情報は、ふつう文末に遊離された要素が表す。

(13) Il vous va très bien, *ce pantalon*.
(14) Tu l'as déjà fini, *ton travail*?

(13)では主語が、(14)では直接目的語がそれぞれ文末に遊離されている。古川は文

末遊離構文を分析し、文末の要素は主題を表しているのではなく、補足的な情報を表していると主張している。[35] （川口）

結論 [36]

本書のタイトルである『ことばの内なることば』Languages within Language の意味するところは何だろうか。冒頭で述べたように、FÓNAGY は以前にもフランス語の論文においてLes langages dans le langageというタイトルを用いている。ソシュール的伝統に従うならば、langages は体系としてのラングをパロールとして具現化する言語活動の多重性・多層性を示唆していると考えることができよう。

まず話者は言語を音声として具体化する過程の中で、文法規則を運用することで伝達される言語的情報に補足的な言語付帯的情報を重ね合わせている。二重コード化モデルによれば、その過程は第一次コード化の内容が第二次コード化によって変形される過程である。言語付帯的情報が補足的なのは、それ自身が独立して実現することがなく、常に言語的内容に付帯することで中立的な伝達からの偏差を生じさせるものだからであり、その結果として伝達内容に多層性が生み出される。

次に第二次コード化による変形は、言語のあらゆる階層に対して起きる。音声・音韻のレベルについては2章で、形態・統語のレベルについては3章でいくつかの現象を考察した。さらに語の多層的な意味構造も、第二次コード化によって語がメタファー的に使用され、意味の偏差が蓄積した結果として生じると考えられる。

第二次コード化の変形の過程そのものも、複数の構成要素が多重的に重ね合わさる過程として捉えることができる。たとえば第5章では、複雑な感情のイントネーション・パターンが、いくつかのより単純な構成要素の複合形として分析される。詩的言語を扱う12章では、多層的な変形の方法とその複合形の生みだす表現効果が詳細に検討されている。

ところでFÓNAGYによれば、二重コード化という過程は、心的なメカニズムとして捉えられ、意識・前意識・無意識といった多層的な過程を経るものである。言語付帯的情報は無意識的な一次過程思考に基づき、前言語的な感情を表現する。一方、意識の領域で行われる概念的思考は、既に話者にとって自動化されている音韻規則や文法規則によって実現される。これらの規則の運用はもはや意識的な操作を必要としないが、抑圧・制御された無意識とは異なるレベルである前意識的過程を表しているとされる。

以上のような言語活動の多層性を FÓNAGY は言語に本質的な特徴であると主張

する。なぜ本質的かと言えば、言語活動の多層性こそが言語の進化を促し、同時にますます複雑化する社会活動に人間が適応していくのを可能にしてくれるからである。

言語活動を言語的情報と言語付帯的情報との二重コード化とする考え方はFÓNAGY のモデルに限らない。本書の中でしばしば引用される Ch. BAILLY (1921)[37] や K. BÜHLER (1934)[38] も、用語は異なりこそすれ、すでに二重コード化の原理に基づいた言語伝達のモデルを提示している。FÓNAGY による二重コード化モデルの特質は、機能主義的な言語記述において周辺的領域に追いやられていた言語付帯的情報の伝達を言語活動の中心部に据え直し、言語記号の生成および言語変化のメカニズムに不可欠な原動力としての地位を与えたことであろう。

一般にスタイルと総称される言語付帯的情報は、機能的対立によって記述されるような言語体系には属していない。それは話者が個々の状況に応じて表現する感情や態度を表現するものであり、ソシュールのいうパロールの領域に属するものである。

しかしそうしたパロールの領域の現象は、言語学的に捨象すべき個人的変異にとどまるものではない。FÓNAGY によれば、言語が具現化される過程に現れる言語付帯的情報は、言語体系を運用する概念的思考に単に付随するスタイルではなく、全く別種の思考原理に従うものなのである。それはジェスチャによる模倣や類似物とのメタファーを通じて対象との同一化をはかろうとする一次過程思考の原理であり、精神分析理論の伝統に従えば、欲動の充足を追求する人間の基本的な精神過程に根ざすものである。

この一次過程思考が、現実との適合を図る二次過程思考とともに人間の精神過程を形づくるものであるならば、それを土台とする言語付帯的情報は言語的情報に劣らず本質的なものであるといえる。言語を運用するのは常に個々の話者であり、話者は常にこれらの精神過程に従って言語活動を行うからである。

しかし FÓNAGY が等しく強調することは、現在我々が獲得している言語体系はあらかじめ概念的思考として成立していたわけではなく、上の一次過程思考と二次過程思考の双方を経ることによって蓄積されてきたものであるという点である。二重コード化モデルにおいては、この過程は第二次コード化による変形が脱有縁化を経て、第一次コード化のための言語規則の中に定着する過程として捉えられる。それは共時態において言語活動が引き起こす動的な過程、すなわち言語進化の過程そのものに他ならない。タイトルの副題『進化的アプローチ An evolutive approach』が示すように、FÓNAGY の提唱する二重コード化モデルは、言語活動の中に多層的な精神過程を見出し、その相互作用のメカニズムを解明することによって言語変化を説明しようと

いうアプローチなのである。

一つの共時態の中で複数の変異体が競合する。しだいにその中の一つの変異体に向かって求心的な力が働き、やがて体系的な進化が訪れる。「変異体の葛藤」あるいは「変異体の弁証法」はFÓNAGYが言語変化の研究に着手し始めた頃から好んで用いた表現であった。その後も彼が追い求めることになった聖杯とは、まさしくこの変異体の弁証法の本質であった。本書を読む者はその本質が多層的な精神過程に関連するのではないかという示唆を与えられるであろう。しかし同時にその本質が解明されるにはまだ多くの論拠が必要になることを知らされる。その意味で、この論評を結ぶべきことば、『ことばの内なることば』はようやくその輪郭がほのかに見えてきたと言えるかもしれない。（中田・川口）

註

* 本論評を亡きユディト・フォーノジ Judith FÓNAGY の魂に捧げる。

[1] 動的共時態の重要性に初めて言及した論文は、紛れもなくRoman JAKOBSONの"Prinzipien der historischen Phonologie," *Travaux du cercle linguistique de Prague*, 4, 1931, pp.247-267である。Eli FISCHER-JØRGENSENの概説書とは*Trends in phonological theory*, Akademisk Forlag, 1975のことで、FÓNAGYの論文"Über den Verlauf des Lautwandels", *Acta Linguistica Hungarica*, 6, 1956, pp.173-278が引用されている。また、以下の論考では「動的」という弁別素性が論じられている。
Ivan FÓNAGY, "Traits distinctifs dynamiques, " in *Prehistory,History, and Historiography of Language, Speech and Linguistic Theory*, Bela Brogyanyi (ed.), John Benjamins, 1992, pp.133-141.

[2] Yuji KAWAGUCHI, "Dimension perceptuelle des voyelles turques", *Acta Orientalia Aca. Sc. Hun.*, 42(2-3), 1991, pp.339-360; "Sur les adjectifs intensifs en turc moderne", *Turcica*, 24, 1992, pp.317-333.

[3] Ivan FÓNAGY, "Languages within language. Toward a paleontological approach of verbal communication, in W.C. MCCORMACK (ed.) *Approaches to language*, 1978, Mouton, The Hague, pp.79-134.

[4] Ivan FÓNAGY, "Les langages dans le langage", in A.A.V.V., *Langages, II^es Rencontres psychanalytiques d'Aix-en-Provence*, 1984, Les Belles Lettres, Paris, pp.303-353. 以下の書には1991年までの氏の文献目録が掲載されている。Ivan FÓNAGY, *Le lettere vive Scritti di semantica dei mutamenti linguistici*, Ed. Dedalo, Bari, 1993, pp.375-387.

[5] FÓNAGYの論文はContributions from outside the Schoolsの中に分類される。JØRGENSENの上掲書 p.440 参照。

[6] この章の内容は以下の諸章と関連する。1. Diversity of the lexicon, pp.1-17; 2. Dual encoding; Vocal style, pp.18-40; 17. Languages within language: Dynamics and evolution, pp.603-698。

[7] 音声についてはとくに 5. Vocal expression of emotions, pp.87-173, 句読点の振舞いについては 14.Semantic structure of punctuation marks, pp.531-561 を参照。

[8] André MARTINET, *Élements de linguistique générale*, Armand Colin, Paris, 1970 , p.21.

[9] Ivan FÓNAGY, "La mimique buccale; Aspect radiologique de la vive voix," *Phonetica*, 33, 1976, pp.31-44.

[10] 「一次過程の場合、心的エネルギーは自由に流れ出て、置換えと圧縮の機制にしたがい、とらわれることなく、ある表象から別の表象へと移ってゆく。このエネルギーは、欲望を構成する充足体験(原始性幻覚)にかかわるさまざまの表象を、充分に再備給する傾向をもつ。二次過程の場合には、エネルギーは、流れ出る前にまず統御され「拘束」される。様々の可能な充足の道を試してみる心的実験がおこなわれて、充足は延期され、表象はより安定したやり方で備給される。一次過程と二次過程の対立は、快感原則と現実原則の対立と関係を持つものである。」(J.ラプランシュ&J.B. ポンタリス, 村上仁監訳,『精神分析用語辞典』, みすず書房, 1977, p.15.)

[11] 音素は意味を持たないため、厳密には音変化はメタファーとは言えない。しかし音素の置換えによって文体的価値が生まれる過程はメタファーに類似する原理に従っていることを FÓNAGY は指摘している。本書の pp.638-639 を参照。

[12] 音韻体系の記述における地域的・社会的変異の位置づけの推移については André BOREL et Michel BILLIÈRES, "L'évolution de la norme phonétique en français contemporain," *La Linguistique*, 25, 2/1989, pp.45-62 を参照。

[13] Henriette WALTER, La phonologie du français, Paris, PUF, 1977, p.13.

[14] この章の内容は以下の諸章に関連する。5. Vocal expression of emotions, pp.87-173; 11. The metaphor: A research instrument, pp.337-357; 12. Why poetic language?, pp.358-504。

[15] Ferdinand de SAUSSURE, *Cours de linguistique génégale*, édition critique préparée par Tulio de MAURO, Paris, Payot, 1972, pp.101-102.

[16] Ivan FÓNAGY, *La métaphore en phonétique*,Ottawa, Didier, 1980.

[17] 他の箇所では口頭模倣 oral mimicry とも呼ばれている。

[18] Pièrre LÉON, *Phonétisme et prononciation du français*, Paris, Nathan, 1992.

[19] D.Robert LADD, *Intonational phonology*, Cambridge University Press, 1996.

[20] Cécile FOUGERON & Sun-Ah JUN, "Rate effects on French intonation: prosodic organization and phonetic realization, " *Journal of Phonetics*, 26, 1998, pp.45-69.

[21] Ivan FÓNAGY, "L'accent français: accent probabilitaire,", *in L'accent en français contemporain* (*Studia Phonetica*), Vol.15, I. FÓNAGY &P. LÉON(eds.), Ottawa, Didier, 1980, pp.123-233.

[22] Arbert Di CRISTO,"Le cadre accentuel du français :essai de modélisation," *Langues*, vol. 2, n°3 (première partie:p.184-205) & n°4 (deuxième partie: p.258-269), 1999.

[23] Corinne ASTÉSANO, *Rythme et accentuation en français : invarience et variabilité stylisitique*, Paris, l'Harmattan, 2001.

[24] この章の内容は以下の諸章に関連する。3. Syntactic gesturing, pp.41-57; 4. Syntactic regressions, pp.58-86; 7. Situation and meaning, pp.191-244; 8. Fading and dynamics, pp.245-265; 15. Why gestures?, pp.562-586。

[25] Serge KARCEVSKI, "Introduction à l'étude de l'interjection," *Cahiers Ferdinand de Saussure*, 1, 1941, p.200.

[26] «reccurent utterances bound by narrow links to typical social situations» FÓNAGY, *Situation et Signification*, Amsterdam, John Benjamins, 1982 では énoncé lié と呼ばれている。

[27] *Situation et Signification*, p.52, 54

[28] p.194 «Bound utterances, in contradistinction to *idioms*, do not mean anything *different from* the corresponding free sentences: they simply mean *less*.»

[29] *Situation et Signification*, p.107.

[30] Ivan FÓNAGY, "À propos de la genèse de la phrase enfantine," *Lingua*, 30, 1972, pp.31-71 を参照。ここの論文は以下の論文からの引用である。Ivan FÓNAGY, "Prélanguage et regressionssyntaxiques," *Lingua*, 36, 1975, p.165.

[31] Betsy Kerr BARNES, " An Empirical Study of the Syntax and Pragmatics of Left Dislocations in Spoken French, " in O.JAEGGLI and C.SATILVA-CORVALAN, *Studies in Romance Linguistics*, 1986, Foris, pp.207-223 の pp.209-210 参照。

[32] B. MacWHINNEY, and E.BATES , "Sentential devices for conveying giveness and newness: a cross-cultural development study," *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, 17, 539-558.

[33] Maya HICKMANN, "7. Discourse Organization and the Development of Reference to Person, Space, and Time," in Paul FLETCHER and Brian MacWHINNEY (eds.), The Handbook of Child Language, Blackwell, 1995, pp.194-218 の特に p.207 を参照。

[34] 右方遊離はそれほど幼児言語に特徴的ではないという。Ivan FÓNAGY(1975) pp.166-167.

[35] 古川直世,「フランス語における主題の概念と遊離構文」,『文芸言語研究』, 言語篇, 12, 1987, pp.165-186 の p.181 を参照。

[36] とくに 17. Languages within language: Dynamics and evolution, pp.603-698 を参照。

[37] Charles BALLY, *Précis de stylistique*, Geneva, Eggiman,1921.

[38] Karl BÜHLER, *Sprachtheorie*, Jena, Fischer, 1934.